淫夢の国のアリア
雨乃アリア
Aria Ameno

1

夕暮れの街角。

見知ったような、知らないような、曖昧な景色だ。

人や車がせわしなく行き交う表通りから一本入った、ひと気のない、薄暗い路地。

そうはいってもオフィスビルや商店、人家の裏口が道に面しているから、いつ人が来てもおかしくはない。

街の喧騒を遠く聞きながら、朝比奈繭（あさひなまゆ）はみずからの裸身を見下ろした。雑然とした路地裏の風景にはそぐわない、白く細い肢体は、緊張と興奮とでわずかに震えている。慎ましやかに存在を主張する胸のふくらみに掌をあててみると、すっかり速くなった鼓動とともに、火照った肌がじんわりと熱を伝えてきた。

「またこんな……」

最初こそ戸惑いばかりだったが、幾度も繰り返されるうち、すぐにそうと

悟るようになった。
たいがいが今日みたいに、フィルターがかかったような色合いの世界のなか、繭は全裸で佇んでいて、そうと気づいたときには、もう我慢ができないくらいに欲情してしまっているのだ。
数えきれないくらい見た夢。
場所や状況さえ異なれど、いつも一糸まとわぬ姿でどこかの屋外にいて、そうして――。
「んっ……」
繭は細い指を下腹部へすべらせると、すでに臨界点に近づきつつある媚肉

へと、そっとあてがった。
これも毎度のことだった。人に見つかりはしないかとどきどきしながら、そしていっそ見つかってしまいたいというしろめたい欲望に突き動かされながら、自分を慰めるのだ。
熱い粘液の滲み出した卑猥な裂け目を押し開く。内にこもっていた凶暴な性欲が一挙に放たれたようで、そうなるともう制御が効かなかった。
「あぅ……」
ひくひくとかすかに蠢く処女肉の窄まりから溢れ出した蜜液を人差し指と中指とですくい取り、いまかいまかと刺激を待ちわびながら物欲しげに震え

る突起へと、ゆっくりと塗りつける。

「――んふぅっ！」

瞬間、きゅっとお尻に力が入り、充血した下の唇から反動のように涎がこぼれて、ぴんと張りつめた白い太ももを濡らした。

繭は人差し指と中指とで淫核を挟み込むようにあてがうと、ゆっくりと小さく円を描きながら転がし、しだいにそのスピードを上げていく。

快楽のメーターが上昇していくのを感じながら、繭は一歩、また一歩と、自慰をしたまま路地を表通りへ向けて進んでいく。もとより十数メートル程度の距離だから、すぐに街のざわめきは目前に迫り、繭の裸身に降りかかっ

てくる。

「気持ちいい……見て、繭の、繭の裸、繭のオナニー、見て……」

痛いくらいに腫れ上がった突起を無我夢中で擦る指の動きをことさらに激しくして、繭はついに表通りへと足を踏み出した。

――そこで目が覚めた。

はっと勢いよくベッドに起き上がった繭の全身は汗まみれで、鼓動は早鐘を打っている。真っ暗な部屋にはクーラーがうなり、少し肌寒いくらいだというのに。

繭は枕元の時計を引き寄せて、ため息をつく。まだ午前二時だ。眠りにつ

いてから二時間ほどしか経っていない。
このままふたたび眠ろうかと横になりかけたが、服が濡れてしまって気持ちが悪い。風邪でもひいたらまずいので、着替えたほうがいいだろう。
ベッドから降りて、汗で肌にひっついてしまっているTシャツを苦労して脱ぎ捨てる。ショートパンツから脚を抜き、ふと気になって下着の股間に触れてみた。
（やだっ……）
さっきの夢のせいなのは疑いようもないだろう。下着はすっかり濡れそぼって、溢れた体液で熱を帯びている。

（夢でちゃんとイケなかったから……？）

いつも見る夢では、繭は最後まで達していたのだ。それがどうしたことか、今夜だけは途中で目覚めてしまった。そもそも途中で目覚めること自体が初めてだし、ほかにもいつもと違うのは――。

（どうしてわたし、街に出ていこうとしたんだろう……）

暗い路地裏でひそやかに自慰をして達するだけでは飽き足らず、今夜の夢での繭は、あろうことか日中の街なかへ、みずからを慰めながら歩み出していこうとしたのだ。いくら夢だとわかっていたといっても、自分にしてみればあまりにも大それたことだった。

（でも、あそこで出ていってたら……）

想像すると、じゅん、と濡れた下着の内側が疼いて、恥ずかしい染みが白い布地をいっそう侵食する。

外で、裸で、オナニーして、人に見られて……。

夢で何度も見ているくらいだから、自分にそういう願望があるのはいいかげん認めざるを得なかったし、もうあきらめてもいた。どうせ夢での話だし、まさか実際にしたことなどはない。したい、と思ったことも不思議となかった。だが――。

繭の鼓動はいまだに落ち着きを取り戻していなかった。

（だめ、それは、ぜったい……）

理性が懸命に抑えようとするが、抑制された欲望を押しとどめられるほど、それはなかなか強くなってはくれない。夢のなかとはいえ、すでに絶頂をおあずけにされ、そのうえ初めての街なかでの露出も中断させられているのだ。

頭では必死に否定しつつも、繭の指先は自然とショーツのゴムに伸び、ためらいなくそれを下ろしてしまう。

暗い部屋のなか、かすかに浮かび上がるみずからの裸身を見下ろして、繭は身震いした。

（夢の続きみたい……）

そう、これは夢。そういうことにしておこう。

薄く部屋の扉を開き、家族が寝静まっているのを確かめると、繭は足音を忍ばせて玄関へと向かう。さすがに靴だけは履いたほうがいいだろう。履きなれたスニーカーをひっかけて、音をたてないように、ゆっくりと玄関のドアを開き、繭は裸のまま、ついに家の外へと足を踏み出した。

続きは製品版でお楽しみください。